



Higashi Sapporo
Hospital's
Newsletter MADO

January 2025 No.119



Higashi Sapporo Hospital
医療法人
東札幌病院

2025年1月発行
発行責任者／病院長 日下部俊朗
札幌市白石区東札幌3条3丁目7-35
TEL.011-812-2311(代表)
FAX.011-823-9552
E-mail: info@hsh.or.jp
HP: <https://www.hsh.or.jp>

2025年の思想のKeyword

私たちの尊厳のすべては、考えることのなかにある

(「パンセ, 仏Pensées; 宗教およびいくつかの問題に関するブレズ・パスカル1623-1662の諸考察」より)

第4章「人間の尊厳」をめぐる円環構造

— 死者の尊厳について —



医療法人東札幌病院
理事長 石谷 邦彦

昨年の10月、私の母校である札幌医科大学の解剖学講座永石歓和教授が主催する「献体」に関する市民公開講座“命をつなぐ贈り物～献体が拓く医学の未来”が開催された。その演者の1人として“献体の意義-人間の尊厳(human dignity)概念を考える”というタイトルで話をさせてもらった。最近日本ではCOVID-19 pandemicを境に「献体」の希望者が減じ、将来的に医学教育、研究、そして医療技術の研修(サージカル・トレーニング)に支障をきたす懸念が開催の動機であった。かつて私も医学生時代に母校で「献体」による解剖学実習を受けておりその感謝の念もあり積極的に講演を受諾した。

私は緩和ケアにおける重要な課題の一つ、「安楽死」問題を長年にわたり考察してきた。その帰結として、イマヌエル・カントの「人間の尊厳」概念が「安楽死」問題の主題であり、かつ「献体」の意志がその象徴的意義を表していると思うに至った。講演の最後に、「カントは、“人間が尊いのは自らを律して生きる自由を持ち、自分の幸せのため他人の幸せのためにも道徳的に行為するから”と説いている」と締め括った。

日本では「献体」後の遺骨に対し厳かに敬う文化がある。仏教に限らず宗教的な儀式を介しての固定的な通念である。この遺体に対する畏怖とそれらがもつ象徴的な力は世界に共通して存在している。すなわち、“敬意をもって遺体を扱う義務がある”という普遍的な信念は道徳哲学における「死者の尊厳」という深い難問を提起する。例えば胎児の尊厳、臓器の売買、COVID-19 pandemicにおける看取り、さらに戦争、飢餓による死などに議論の場を拡げている。

2012年ハーバード大学のマイケル・ローゼン教授による「尊厳-その歴史と意味. Dignity: Its History and Meaning」¹⁾²⁾の中で、彼は「死者の尊厳」に関しカントの解釈を肯定的に記述し尊厳概念に一石を投じている。

尊厳の概念はさまざまな多様性の複合体であることはすでに述べた。³⁾第2次世界大戦後、尊厳の概念は人々の日常に留まらず政治的および法的な生活において基本的な位置を占めるようになった。例えば国際連合による世界人権宣言(1948年)第1条の冒頭では“すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利について平等である”とし、ドイツ連邦共和国基本法(1949年)第1条は“人間の尊厳は不可侵である”との文言から始まっている。しかし、その議論の中心はカントの観念であることに論を俟たない。カントは「道徳形而上学の基礎づけ. Grundlegung zur Metaphysik der Sitten.1785」⁴⁾において、“人間の尊厳の根拠となるのは自律であり、そして無条件で比較のできない価値を持つ道徳性のみが人間の尊厳を担保する”と明記している。そして人間は自律(人間自身が法律の源となる)を体現する道徳法を持つ故に尊厳は常に「人間の尊厳」であると説く。法は義務を伴い、カントは、自己に対する義務と他者に対する義務、そして私たちが「人間の尊厳」に対する敬意を表明する義務を負うとした。これはすでに述べたように、どのようなものであれ自分に合った生き方を選んでいく個人の能力を自律とする現代の理解とは大きく異なるものである。⁵⁾

マイケル・ローゼン教授は、第3章「人間性(人間の尊厳)に対する義務」で、“私達が死者に対して尊厳をもって振る舞う義務があるのは何故か”と再び問い、カントが“人間の尊厳を敬う義務は、根本的には自己に向けられた義務である”としているが故に、その義務を果たすことなしに人間ではあり得ないと主張する。そして尊厳を敬う主体、すなわち遺された者の尊厳の保持は、死者に対して敬意を払うことにより初めて可能となると結論している。ここに「人間の尊厳」を巡る円環構造(最上のものを求め、巡り巡ってまたもとの出発点にもどる)を見てとれる。最近の報道で、ガザ地区の被災者が遺体を埋めた上に瓦礫の石を積んで祈りを捧げる姿が映像された。死者に対して敬意を払う、すなわち「死者の尊厳」を行為遂行することによって遺された者もまた人間の尊厳を保持することが可能となる姿であった。

「献体」の議論を契機にマイケル・ローゼン教授の著作「尊厳-その歴史と意味」を紐解いてみたが、彼はカントの“人間の尊厳の不可侵の神聖さ”を軸にして「死者の尊厳」を見事に演繹している。イマヌエル・カント研究にも秀でているマイケル・ローゼン教授の「人間の尊厳」の哲学的思考は私たちにとって大きな福音であった。

参考文献

- 1, Michael E. Rosen : Dignity: Its History and Meaning. Harvard University Press. 2012
 - 2, マイケル・ローゼン: 尊厳-その歴史と意味. 内尾太一、峯陽一訳 岩波新書 2021年
 - 3, Yukie Ishitani : IRS-SCPSC Newsletter New Year Special Issue (BMJSPCare Blog Feb.15.2024)
 - 4, Immanuel Kant : Grundlegung zur Metaphysik der Sitten. 1785. (道徳形而上学の基礎づけ. 御子柴善之訳 人文書院 2022年)
 - 5, Kunihiro Ishitani : Human dignity and Autonomy-The fallacy of Autonomy・Self-determination, and Right to self-determination – IRS-SCPSC/ News Letter January. 2024
-

第5回がん緩和ケアに関する国際会議： 5th Sapporo Conference for Palliative and Supportive Care in Cancer (SCPSC)のプログラム

“光陰矢の如し”といわれるように、5th SCPSCは早くも来年の7月に迫って来ました。

「窓」前号では、その意図を「新しい時代を迎えようとしているがん緩和ケア」のタイトルで紹介致しました。

そのプログラムはすでにSCPSCのWebサイト(<http://www.sapporoconference.com>)に掲載され、

世界の多くの方々から好評のメールを頂いております。

今号では、まだご覧になっていない方々に改めてプログラムの詳細をご紹介します次第です。

そして、この2月から皆様の参加登録と一般演題の募集が始まります。

多くの方々のご応募を期待しております。

5th SCPSC 実行委員会事務局 (office@sapporoconference.com)

2026. **7.10** Fri.

シンポジウム1
08:00-12:00

がん疼痛に対するオピオイド：新たな科学とベストプラクティス

座 長： **David Hui** (University of Texas MD Anderson Cancer Center, USA)

Russell Portenoy (Albert Einstein College of Medicine, USA)

パネル 1

序論：オピオイド応答の新たな科学

David Hui (University of Texas MD Anderson Cancer Center, USA)

Russell Portenoy (Albert Einstein College of Medicine, USA)

オピオイド応答のゲノム-ワイド関連解析：がん疼痛管理への意義

西澤 大輔 (東京都医学総合研究所)

がん疼痛に対するオピオイド療法：薬理遺伝学的解析のインパクト

D.Max Smith (Georgetown University, USA)

がん疼痛における神経炎症：

オピオイド療法における腫瘍微小環境の役割

Angela Santoni (Sapienza University of Rome, Italy)

Edoardo Arcuri (Regina Elena Cancer Institute of Rome, Italy)

パネル 2

序論：がん疼痛に対するオピオイド使用の臨床アップデート

David Hui (University of Texas MD Anderson Cancer Center, USA)

Russell Portenoy (Albert Einstein College of Medicine, USA)

がん疼痛治療におけるブプレノルフィンとメサドン

Russell Portenoy (Albert Einstein College of Medicine, USA)

オピオイドが免疫応答と内分泌機能に与える影響

Jason Boland (Hull York Medical School, UK)

オピオイドの(脳科学的な)強化(Reinforcement)／

報酬(Reward)に与える影響：乱用のリスクとその緩和戦略

Joseph A. Arthur (University of Texas MD Anderson Cancer Center, USA)

ランチョンセミナー1
12:00-13:00

医療、ナチズム、及びホロコーストに関するランセット委員会：
歴史的エビデンス、今日における意義、明日への教訓
Herwig Czech (Medical University of Vienna, Austria)
座長：Declan Walsh (Levine Cancer Institute, USA)

シンポジウム2
13:00-17:00

がん患者への個別化された緩和ケアとサポーター・ケアの時代： 進歩と革新

座長：**Areej El-Jawahri** (Massachusetts General Hospital, USA)
中川 俊一 (Columbia University, USA)

※本セッションでは、終末期における化学療法、放射線治療、免疫療法、標的療法、緩和手術などの緩和治療の妥当性について議論する

進行がん患者に対する緩和ケアの役割

Jennifer Temel (Massachusetts General Hospital, USA)

血液悪性腫瘍患者に対する緩和ケア：現在の動向と将来の方向性

Areej El-Jawahri (Massachusetts General Hospital, USA)

新規治療法と個別化医療の時代における緩和ケア

Jessica Bauman (Fox Chase Cancer Center, USA)

ギャップを埋める：外科の質向上のための緩和ケアの活用

Ana Berlin (Columbia University, USA)

イブニングセミナー
17:00-18:00

未来のケアプランニング - 緩和ケア患者のためのより良いプランニングに関するヨーロッパの視点
Mark Taubert (Cardiff University School of Medicine, UK / ヨーロッパ緩和ケア学会 副理事長)
座長：高田 弘一 (札幌医科大学)

2026.7.11 Sat.

シンポジウム3
8:00-12:00

緩和ケアにおける患者と臨床医の出会いに対する精神力動的視点

座長：**Friedrich Stiefel** (University of Lausanne, Switzerland)
Sarah Dauchy (APHP, Centre University of Paris, France)

緩和ケアにおける患者と臨床医の出会いに対する精神力動的視点の現状
精神力動的心理学により形成される臨床医と患者間のコミュニケーションの違いを理解する

Friedrich Stiefel (University of Lausanne, Switzerland)

精神分析理論の基本的諸仮定とそれらの緩和ケアへの関連性
緩和ケアに適用される精神分析理論の臨床的視点

Sarah Dauchy (APHP, Centre University of Paris, France)

精神力動的アプローチが医学と緩和ケアにどのように貢献するか？
初期の精神分析からその後の医療分野への適用までの歴史的な道のり

James Levenson (Virginia Commonwealth University, USA)

精神療法的アプローチと緩和ケアはどのようにがん医療に統合され得るか？
精神分析的ケアと緩和ケアの統合がもたらす臨床的付加価値について

Camilla Zimmermann (University of Toronto, Canada)

「内側」からの視点：緩和ケアにおける精神腫瘍医としての働き方
精神力動的指向を持つ精神科医による患者と臨床家へのアプローチ

清水 研 (がん研究会有明病院)

ランチョンセミナー 2
12:00-13:00

比較文化学におけるスピリチュアリティ、スピリチュアル・ケア

Karen Steinhauer (Duke University, USA)

座長：小西 達也(武蔵野大学)

シンポジウム4
13:00-16:30

帮助死(安楽死、VAD、MAID)と緩和ケア：表裏一体か？

座長：Luc Deliens (Vrije Universiteit Brussel & Ghent University, Belgium)

David Currow (University of Wollongong, Australia)

第1部 世界における帮助死の実践と経験

世界における帮助死法制と実践の進展

Luc Deliens (Vrije Universiteit Brussel & Ghent University, Belgium)

帮助死が長期にわたり合法とされている国々で得られた
緩和ケアと帮助死の関係に関する実証的エビデンス

James Downar (University of Ottawa, Canada)

ビクトリア州での合法化以来、オーストラリア各州において、
自発的幫助死に関する法律に緩和ケアの臨床医はどのように対応してきたか？

David Currow (University of Wollongong, Australia)

スイスの帮助死制度における緩和ケア医の経験

Claudia Gamondi (University of Lausanne, Switzerland)

第2部 映画上映

“The Last Flight Home”

監督: Ondi Timoner

1982年7月、イーライ・ティモナーは突然の脳卒中で左半身不随となり、53歳でエア・フロリダのCEOを辞任せざるを得なくなった。当時、彼は1日2マイルを走り、テニスをし、健康的な食生活を維持していたのだが、その後は、歩行が不安定なまま生涯を終えた。

イーライ・ティモナーは2021年1月、呼吸困難で入院。我々は、イーライ・ティモナーの最期の日々、素晴らしい功績、悲劇的な喪失、そして何よりも永続的な愛に満ちた比類なき人生を目の当たりにする。「The Last Flight Home」は、彼の最後の旅路を、彼の勇気ある家族が最後まで見守るといふ、感動的な社会体験を描いた作品である。

この映画は、米国ユタ州パークシティで開催された2022年サンダンス映画祭で最優秀ドキュメンタリー賞を受賞した。

※この映画の予告編はYouTubeで見ることができる。Luc Deliensがアメリカの学会でこの映画全編をレビューしたところ、帮助死における緩和ケアの重要性と複雑さを示す非常によくできた作品であった。プロデューサーのMark Barger (New York city, USA)は、約1時間30分のドキュメンタリーを、日本語字幕を含めて45分に短縮することに同意した。

第5回

がん緩和ケアに関する国際会議

完全
同時通訳

主催 医療法人 東札幌病院

大会長 小船 雅義(札幌医科大学)

会期 2026年7月10日(金)・11日(土)

会場

札幌パークホテル

〒064-8589 札幌市中央区南10条西3丁目

TEL 011-511-3131

<https://park1964.com/access>

事務局

医療法人 東札幌病院

〒003-8585 北海道札幌市白石区東札幌3条3丁目7番35号

TEL 011-812-2311(代表) FAX 011-823-9552

E-mail: office@sapporoconference.com

ホームページ: <http://www.sapporoconference.com>



令和6年度栄養関係功労者「優良給食施設」として 厚生労働大臣表彰を受彰しました

栄養課一同

東札幌病院は、2024年10月、全国栄養改善大会において、「優良給食施設」として厚生労働大臣より表彰されました。これは、長年にわたり栄養改善に尽力し、その功績が特に顕著であると認められる者および特に他の模範と認められる優良な特定給食施設を表彰するもので、今年度は全国で16施設が受賞し、その1施設に選ばれました。

当院へ入院される約8割以上が進行・再発・末期がんの患者様で、栄養課ではこれまで多くの方々の栄養管理に取り組んでまいりました。緩和の分野において、暮らしの中の営みの一つである「食ること」という普段当たり前にやっていることが一人ではできなくなった状況の人たちに対し、管理栄養士という立場や視点から専門的に援助することで、少しでも食べるという日常をもたらしところに大きな役割があり、日々業務に携わっております。患者様の多くが普段通りに食べられない状況に「食べないと病気が進行する」、「食べないと衰弱する」といった不安を抱えながらも、切実な思いで食事と向き合っておられます。そのような患者様の思いを受け止め、できるだけ食事がとれるよう個々の病状や栄養状態のほか、嚥下や咀嚼力、可能な範囲で嗜好等に対しても多様な個別対応を実施し、たとえ少量であっても食べるという患者様の日常を支援することに重きをおいたかかわりを評価していただきました。

当院では、開院以来“医療の本質はやさしさにある”という理念のもと、患者様やご家族の価値観や生き甲斐など、生活や人生で大切にしていることや希望していることに耳を傾け「もっともその人らしい」生活となる

ことを尊重したかかわりを大切にしています。ごく普通の日常生活により近い環境を保ち、生活の中にやすらぎや楽しみをもつことができるよう、当院ではどの職員も日々患者様と関わる中でこの実践を続けております。管理栄養士として関わるのはほんの少しの期間かもしれませんが、その人の人生を知り、意思や希望をくみ取り、患者様とそのご家族が何を重要と考えているのかを把握し、その中でも特に「患者様の食に関すること」について理解し、多職種医療チームの中での管理栄養士という立場や視点から、その人の日常生活の一部である食事や栄養面を整えるお手伝いをするを心がけています。食に関する問題を抱えている患者様は以前からたくさんいらっしゃったのですが、このような患者様に対する管理栄養士のサポートの重要性に目が向けられ、評価され、このような受賞に至ったことを励みに今後も安全で安心な食事の提供および栄養管理に努めていきたいと思っております。



放射線取扱主任者講習を終えて

放射線課 原 優太郎

現在、放射線はジャガイモの発芽防止や、化石の年代測定など幅広く活用されています。医療分野においても例外ではなく、病院では核医学検査や放射線治療が行われています。ただし、放射線を正しく利用・管理しなければ、人体の細胞を傷つけ、最悪の場合、がんを引き起こしてしまうといったデメリットがあります。そうした障害を未然に防ぐために、放射線を使用する場所では病院も含めて放射線取扱主任者と呼ばれる監督者を選任する必要があります。主任者は院内の放射線施設、そこで働く人の被ばく線量が法律の基準を満たしているか確認し、維持に努めるほか、放射線による事故が起きた際、速やかに原子力規制委員会や警察に通報することが求められます。その主任者の資格を得るため、2024年11月11日から15日に東京都の公益社団法人日本アイソトープ協会にて、第一種放射線取扱主任者講習を受講してきました。

講習の内容は講義と実験の大きく2つに分かれていました。まず講義では放射線が人体に与える影響、放

射線の単位、主任者の役割などを学びました。口頭だけでなく、スライドを用いながら視覚的に教えてくださり、理解を深めることができました。また、実験ではサーベイメータと呼ばれる線量計を使って、水中やタイル表面の放射線濃度を測定(汚染検査)したり、中性洗剤や布などで放射線を除去(汚染除去)しました。今回行った実験は、核医学検査室の床や壁に汚染がないか、廃水や放射線治療で用いた部品はそのまま廃棄できるのかを確認する主任者の業務内容に即しており、非常に実践的な体験をすることができました。

今回の講習で、講師の方が主任者の業務において「人の管理」が最も大切だと仰っていたことが印象に残りました。私も院内で放射線業務を行う方に対して、被ばくに関する適切なアドバイスができるようにしたいと思います。そのために講習で学んだことを復習するとともに、日々改正される法令の動向に着目して、知識をアップデートしていきたいです。講習では医療関係ではない参加者も多く、中には自己研鑽のために受講された方

もいらっしやり、良い刺激を受けました。新卒の身でありながら貴重な体験をさせていただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。



MDアンダーソンがんセンター留学研修

(JME:Japanese Medical Exchange Program)

薬剤課 係長 加藤 遥平

この度、MDアンダーソンがんセンターに短期留学する機会に恵まれました。こちらは2023年1月と2月に開催されたThe 1st Team Science Workshopに参加し、チーム医療を共に学んだ日本全国の医師、薬剤師の計4名からなるチームで、2024年10月10日から27日までの計18日間において行われました。この短期留学プログラムはアメリカの医療現場でチーム医療を知ること、Workshopでの学びをさらに深め、医療人、リーダーとしての資質を養うことを目的としています。

Workshopで学んだチーム医療の根底にあるエッセンスは、理論ではなく、医療従事者間の深い信頼関係とコミュニケーションであることを学びました。アメリカの医療現場では、それが自然な形で実現されており、日本のチーム医療の未来について多くのことを考えさせられました。もちろん通訳なしの英語で研修をみっちり受け、課題発表の視点でも研修を受けながら、ブログやFacebookなどでも発信するということを行いながら現地では過ごしていました。

国民皆保険制度ではないアメリカの医療システムは、経済やビジネスとしての効率化を重視し、各医療従事者が高度な専門性を持ち、完全な分業制が確立されている点が特徴です。薬剤師という職種を一つとっても、階層的な役割に応じた分業制が確率されており、最高位の臨床薬剤師は、薬物療法の専門家として患

者中心の医療に不可欠な存在です。医師と連携し、薬物療法の細部を担うことで、より安全かつ効果的な治療の実現に貢献しています。

この医療システムは、病院を企業と捉え、医療を商品化することで、医療技術の革新を促し、患者の選択肢を広げるという利点があります。しかし、高額な医療費や医療格差といった問題も抱えています。一方で、分業制が階層的になっていることは、医療従事者にとってキャリアアップの機会を明確にし、モチベーションを高めるという側面も持ち合わせています。

このようにアメリカの医療を実際に体験することで、日本との医療の違いについて深く考えさせられました。特に、人的・財政的な資源が豊富である点に驚かされました。

今回一緒に留学した仲間は、年齢やキャリア年数も近く、チーム医療に熱い想いを持つ仲間たちです。今後もこのつながりを大切に、日本のチーム医療をsustainableなものにするために、どうすれば良いのかという視点を持って、まずはlocalにこの経験を活かしていきたいと考えています。

研修生活はかなりハードでしたが楽しいこともたくさんあり、普通ではできない貴重な経験ができました。渡航に際し、ならびに渡航中ご協力いただいた全ての方に感謝申し上げます。



外 来 医 師 ス ケ ジ ュ ー ル

★救急対応

(2024年11月1日～)

診療時間		月	火	水	木	金	土	
午前	9:00～12:00	1診 (内科初診)	村上★	日下部★	村上★	村上★	交代制★	交代制★ (内科初診／再診)
		2診	石谷 (一般内科)	石谷 (一般内科)	石谷 (一般内科)	三原 (一般／腫瘍内科)	三原 (一般／腫瘍内科)	出張医 (内科初診／再診)
		3診 (消化器内科)	日下部	伊藤	渡邊	長岡	日下部	
		4診 (循環器内科)	高木	古谷	高木	秋津	秋津	
		5診	梅田 (呼吸器内科)	奇数週 出張医 (整形外科)	出張医 (呼吸器内科)	佐藤(健) (一般／血液内科)	伊達 (呼吸器内科)	
		6診 (一般外科)	信岡	信岡	久慈	信岡	久慈	交代制
		7診	久村 (心療内科)	前田 (乳腺外科)	前田 (乳腺外科)	大村 (乳腺・甲状腺外科)	照井 (一般／糖尿病内科)	
		8診(11:00～) (発熱者・必要時に対応)	担当医	担当医	担当医	担当医	担当医	
		9診			佐藤(昇) (病をよく識る外来)		(セカンドオピニオン外来)	
		放射線治療	坂田	坂田		坂田	坂田	
		内視鏡	安保	渡邊	佐賀	出張医	伊藤	交代制
		腹部エコー			三谷	須釜		
		歯科・ 歯科口腔外科	水越／太子 大内／石谷	水越／太子 大内／石谷	水越／太子 大内／石谷	水越／太子 大内／石谷	水越／太子 大内／石谷	交代制

	診療時間		月	火	水	木	金	土
午 後	14:00～17:00	1診(13:30～) (内科初診／再診)	三谷	出張医	出張医	須釜★	三谷	休 診
		2診	松永 (一般／緩和ケア内科)	佐藤(健) (一般／血液内科)	町野★ (一般／緩和ケア内科)	町野 (一般／緩和ケア内科)	出張医 (一般／緩和ケア内科)	
		3診	佐賀★ (消化器内科)	渡邊★ (消化器内科)	松永 (一般／血液内科)	伊藤 (消化器内科)	長岡★ (一般／消化器内科)	
		4診	秋津 (循環器内科)	偶数週 久野 (循環器内科)	照井 (一般／糖尿病内科)	高木 (循環器内科)	出張医 (脳神経内科)	
		5診		梅田 (呼吸器内科)	井須 (整形外科)	梅田 (呼吸器内科)	須釜 (内科)	
		6診 (一般外科)	久慈★	久慈	久慈★	信岡／久慈★	信岡	
		7診	里見 (一般外科／乳腺・甲状腺外科)	大村 (乳腺・甲状腺外科)	大村 (乳腺・甲状腺外科)	照井 (一般／糖尿病内科)	前田／第2週 九富 (乳腺外科)	
		8診						
		内視鏡室				頭頸部外科出張医		
		放射線治療	坂田／出張医	坂田／出張医		坂田／出張医	坂田／出張医	
		内視鏡	伊藤	佐賀／伊藤	長岡	出張医	佐賀	
		歯科・ 歯科口腔外科	水越／太子 大内／石谷	水越／太子 大内／石谷	水越／太子 大内／石谷	水越／太子 大内／石谷	水越／太子 大内／石谷	

※8診午前は発熱者・必要時に対応(当日予約のみ) 月～金曜日11:00～

※6診午後の外科外来は、手術等により診療時間に変更となる場合があります。

※外来受付時間 午前の外来 月～土曜日 11:30まで 午後の外来 月～金曜日 16:30まで

※土曜日は交代制となっております。詳細はお問い合わせください。

※緊急対応等に備え、内科医師1名は13:30から待機いたします。

※当院では、待ち時間短縮のために予約制を導入しております。予約外診療も
行っております。詳細は受付にお問い合わせください。

※病をよく識る外来(要予約) 水曜日9:00～12:00 担当医師:佐藤(昇)

※セカンドオピニオン外来(要予約) 金曜日9:00～12:00

※石谷外来 火曜日9:00～11:00

※放射線治療外来は、地下1階診察室です。



●交通のご案内
地下鉄東西線「東札幌駅」より
徒歩5分

駐車場について

当院の駐車場はゲート式になっております。駐車場ご利用の方は、受付または事務室にて駐車券をご提示ください。ご利用料金は以下の通りです。

ご利用料金

外来受診・お見舞いなど、当院ご利用の方は、3時間無料です(以後30分50円)。

医療法人東札幌病院は、公益財団法人日本医療機能評価機構による病院機能評価(一般病院2 3rdG: Ver.2.0)の認定を受けています。

■認定期間
2020年9月26日～2025年9月25日



日本医療機能評価機構
認定第 JC669 号

一般病院2 3rdG: Ver.2.0

Higashi Sapporo Hospital

医療法人 東札幌病院

〒003-8585
札幌市白石区東札幌3条3丁目7-35
電話 011-812-2311 (代表)
FAX 011-823-9552
E-mail: info@hsh.or.jp
HP: <https://www.hsh.or.jp>

東札幌病院は皆様に次のような権利があることを認め尊重致します。

1. 医療を受けるにあたって、大切な一人の人間として尊重されます。
2. 受診される方の個人情報やプライバシーが守られます。
3. 病状や病名・検査結果、受ける処置やケアの内容等について十分な説明を受けられます。
4. 適切な説明のもとに受診される方の意志が尊重され、最良の治療やケアが選択できるように支援されます。
5. 身体的なことだけではなく、必要に応じて社会的・心理的な事柄に関しても支援されます。
6. 療養の経過すべてにわたって、ご希望されれば複数の医師の意見を求めることができます。
7. 最善で安全な医療と必要な健康教育をうけることができます。
8. 医学研究等に参加をお願いすることがありますが、拒否することによって不利益を被ることはありません。

東札幌病院を受診される皆様に御協力いただきたいこと

1. 心身の健康に関する情報について担当者にお伝え下さい。
2. 医療者の説明が不十分な時には、十分理解できるまで質問して下さい。
3. 治療やケアの方針を決めるときには、ご遠慮なく医療者と話し合ってください。
4. 医療者と共につくった治療やケアの計画に積極的に参加して下さい。
5. 院内では常識的な社会人として行動して下さいようお願いいたします。
6. 東札幌病院は全館禁煙です。ご理解とご協力をお願いいたします。
7. 東札幌病院では各階に提案箱を設置しております。ご意見やご要望がありましたらご遠慮なくご利用下さい。